心理社会調査研究法

第1回　社会調査法と社会理論

鈴木　努

2011年5月2日

1　内部観測としての社会調査

社会学とは、社会の成員（メンバー）である「社会学者」が、社会を内側から観察し、解釈する営みといえる。すなわち内部観測である。

社会の成員は相互に観察し、解釈し、行為を行っている。これを社会学では二重の条件依存性（ダブル・コンティンジェンシー）という。社会学者も社会の一員であり、社会学研究も社会の一部である以上、社会学者が外側から社会を観察するということはできない。

社会学者が社会の成員であるだけでなく、社会の成員は誰もが他者を観察し解釈しているという意味で、皆「社会学者」である。このとき、どの成員も社会の一部分であり、社会全体を見通すことはできない。どうしても自分の経験や立場によって、見方に偏りが生じてしまう。

マンハイムの知識社会学ではこれを「存在拘束性」と呼んでいる。人間の知識や思考は、その人の置かれた歴史的・社会的位置に制約されているということである。そのように制約された考えはイデオロギーと呼ばれる。マンハイムはイデオロギーを特殊的イデオロギーと普遍的イデオロギーに区別している。特殊的イデオロギーとは、自分自身のイデオロギーを問わないものである。つまり他人の思考の偏りは指摘しても、自分の思考の偏りは無視してしまうのである。普遍的イデオロギーは、自分と対立する者のイデオロギー性を指摘するだけでなく、自分自身のイデオロギー性も認めるものである（マンハイム『イデオロギーとユートピア』）。

どんな知識や思考もイデオロギーであるならば、社会学における「客観性」は、どうすれば可能なのだろうか。マックス・ウェーバーは『社会科学と社会政策にかかわる認識の「客観性」』において、次のようなことを述べている。科学的思考においても主観を排除することはできない。だから、自分の価値判断の規準を読者と自分に対して明らかにすることが重要である。社会学における客観性とは、価値判断ではなく方法の明示によって可能になるのである。

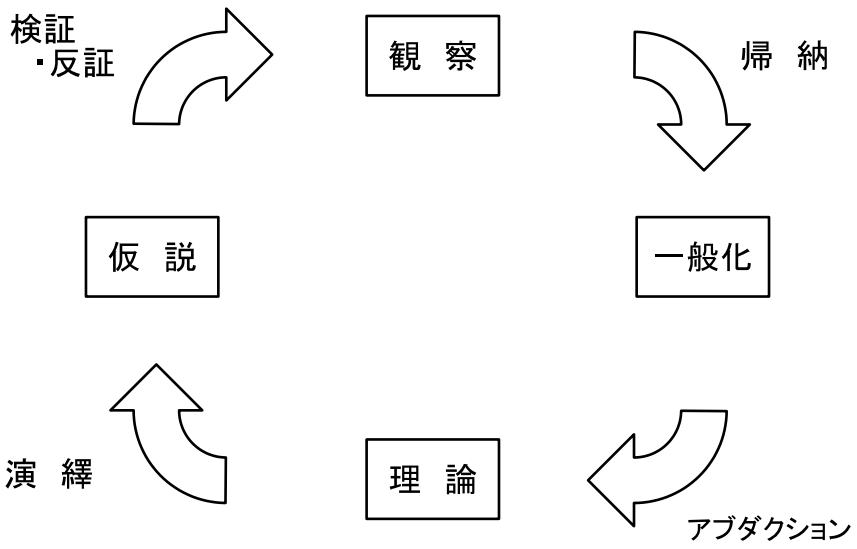

図 1: 科学的研究のサイクル

社会学において社会調査法は、他者に対して自分の価値判断の根拠を示すため、そして自分の価値判断の方法に矛盾や手落ちはないかチェックするために重要なのである。

2　社会学研究における社会調査の位置づけ

社会学において社会調査がどのような役割をもつのかを考えるために、まず科学的な研究がどのような手順で行われるのかを考えてみよう。図１に示したのが科学的研究のサイクルである。実際の研究が必ずこのような手順を踏むとは限らないが、このような手順を踏むのが典型的あるいは理想的だということである。社会学ではこのように現実の一面を純化して取り出したモデルを理念型という。理念型は必ずしも現実と一致しないが、複雑な要素を省いて単純化しているので、ものごとを整理して考えるときには役立つ。

先に社会学者は社会を観察するといったが、観察するだけではない。観察から一般化を行い、理論を作ろうとする。観察の一般化の際に行われる推論の形式が帰納（induction）である。観察されるのはここの具体的な事象だが、そこから一般的な法則性を見出そうとするのが帰納である。帰納による推論は私たちの日常生活でも広く用いられている。たとえば、パソコンや携帯電話などを新しく買ったとき取扱説明書を熟読して使い方を知るのではなく、使いながら操作を覚える

ということはよくあると思う。このとき、特定の操作が特定の結果を生ずるという経験を重ねて、「このボタンはこういう働き」という法則を発見しているのである。しかし、これは実際のプログラムや配線を確認しているわけではないから、誤解している可能性は否定できない。

より社会学的な例を挙げれば、いくつかの国や地域で宗教と自殺率を比較してカトリックよりプロテスタントの方が自殺率が高いという結果（観察）を得て、「プロテスタントはカトリックより自殺率が高い」という法則を導くような推論が帰納である。もしかしたら調査対象以外の地域ではそうでないかもしれないが、全ての場所や時代で自殺率を調べることは難しいので、どうしても限定された観察から一般的な結論を導いてしまうのである。その結論が常に正しいという保証はない。

それに対して演繹（deduction）は論理的には間違いのない推論である[1]。演繹の代表が三段論法である。三段論法とは例えば「1. 全ての人間は死ぬ。2. ソクラテスは人間である。3. よってソクラテスは死ぬ。」といった推論である。このような推論は論理的には常に正しい。ただし、論理的に正しいだけであって、現実に照らして正しいかはまた別である。例えば「1. 全ての鳥は飛ぶ。2. ペンギンは鳥である。3. よってペンギンは飛ぶ。」とか「1. 三角形の内角の和は 180 度である。2. 台形は三角形である。3. よって台形の内角の和は 180 度である。」とかいうように、1 や 2 の仮定が間違っていれば、3 の結論は論理的な考え方としては正しくても内容としては間違っていることになる。

アブダクション（abduction）は帰納とも演繹とも異なる推論の形式である。帰納は観察を一般化するが、なぜそうなのかは説明しない。観察した結果「プロテスタントはカトリックより自殺率が高い」といえたとしても、なぜそうなのか、帰納という推論では説明できない。そこで用いられるのがアブダクションである。アブダクションは論理的な正しさは保証されないが、観察した結果をうまく説明する枠組を与えるような推論である。例えば、プロテスタントはカトリックより教会による信徒どうしの結びつきが弱く孤独になりやすいため自殺率が高くなるのだ、というような説明をするとき、アブダクションが働いている。ここではプロテスタントであることから自殺率が高まること論理的に導かれているわけではない。ただ、「プロテスタントは教会の結びつきが弱く孤独になりやすい」と考えれば、プロテスタントの自殺率が高いことがうまく説明できるというだけである。もしかしたら他にもっとうまい説明の仕方もあるかもしれない。

アブダクションは、観察されたさまざまな、しかし断片的な命題を想像力を働かせてつなぎ合わせ、1 つのストーリーにまとめる働きをしている。理論を作るためにはこのような発想の飛躍（いい意味で）が必要なのである。アブダクションによって作られた理論は正しいとは限らないので、それを現実に照らしてチェックしなければならない。現実的なチェックのための仮説[2]を導くのには演繹が用いら

[1] 高校の数学で習う数学的帰納法は推論の方法としては帰納ではなく演繹である。

[2] これを理論仮説と区別して操作仮説という。図 1 の仮説は操作仮説のことである。

れる。例えば「プロテスタントはカトリックより孤独になりやすいから自殺率が高い」という理論を検証するためには、「プロテスタントの信徒はカトリックの信徒よりも孤独感が強い」という仮説や「孤独感の強いほど自殺しやすい」という仮説を立てて、実際にそれが正しいかどうかを観察する。

理論から演繹された仮説は、観察によって検証または反証される。反証、すなわち仮説が正しくないという証拠が見つかるということも重要である。仮説が反証可能であることは理論が科学的であることの条件であるとさえ考えられている(ポパーの反証主義)。そもそも真偽が確かめられないような理論は科学ではないというのである。例えば、フロイトの精神分析では、ある行動が無意識の欲望によってなされると考えるが、行動は無意識に抑圧されるとも考えるので、行動があってもなくてもそれは無意識の欲望の存在の証明となり、結局無意識の欲望の存在を否定することは不可能である。

仮説が反証された場合、理論は修正され、検証され... というサイクルが繰り返される。これが図 1 に示された科学的研究のサイクルである。社会調査はこのサイクルの観察の部分にあたり、事実発見としての観察と仮説の検証としての観察の両面を含んでいる。事実発見のためにはインタビューや参与観察などの質的調査法が、仮説検証のためには社会統計学に基づく量的調査法が用いられることが多いが、必ずしもはっきりと区別されるわけではない。量的調査によって事実を発見することもあるし、仮説を検証するためにインタビューや参与観察をすることもある。

参考文献

[1] 伊勢田哲治，2003,『疑似科学と科学の哲学』名古屋大学出版会.

[2] 米盛裕二，2007,『アブダクション』勁草書房.

成績評価について

シラバスにも書いたように、小テスト 20 %、期末試験 80 %の比率で成績をつけます。出席はとりませんが不定期に行う小テストを受けていることが出席点になります。最終的な成績は後期担当の先生の評価と合算して決まります。期末試験の前には答案作成の指導を行います。

授業のレジュメはネットからダウンロードできるようにします。

http://www.geocities.jp/snatool/meiji2011.html